

メコン河のほとりで

7年前にインドネシアで開発調査に携わって以来、久しぶりに東南アジアでの仕事に参加する機会に恵まれた。ラオス国メコン河沿岸貧困地域小規模農村環境改善計画調査という長い名称の開発調査に参加して、約2カ月間メコン河沿岸地域を見て回ることが出来た。

今回訪れた地域は首都ヴィエンチャンと第二の都市サヴァナケットを結ぶ国道13号線沿いの農業地帯でラオス国の米生産の中心地域であり、時期的には雨期作の収穫が終わって乾期作の田植えがはじまる頃であった。水田では水牛や牛が稲の残草を食み、アヒルや鶏が餌を探して田面を忙しく動き回っている。田の中に点々と残された樹木は、葉を落として田の土を肥やし、夏には動物や人間に木陰を提供する。高床式の建物の下は水牛の寝床になっており、得られた厩肥は田に還元されている。また、ため池を利用した養魚も行われており、池の横では豚やアヒルや鶏が米糠等を餌に飼育されている。動物の糞尿等は養魚池に戻され、魚の餌となる藻類やプランクトンの栄養源として活用される。このように、有機物の循環を基本とした伝統的な農業が、脈々と生き続けていることを強く感じる。しかしながら、この地域は雨期の洪水被害と乾期の旱魃により米の生産が安定せず、農民の生活向上も併せて農業生産の改善に取り組む必要が生じている。これまでに、小規模灌漑施設の整備などの乾期作導入による安定した営農への転換が図られており、トラクターの普及による農業機械化も急速に進みつつある。

帰国後、隣国タイに関する次のような新聞記事が目をつけた。これによると、タイの東北部では工業化が優先される中で農村が疲弊しつつあると言われている。化学肥料を使い、高価な農機具を買いそろえたため、農家の負債は増え続けたという。ところが最近では、ため池を掘り米だけでなく多種類の作物や動物を育てる循環型の複合農業を基本とした自然農法を実践する農家グループが増えている。まず、自分たちの食糧を確保するものであり、「売るための農業」ではなく、「生きるための農業」と言える。国王が複合農業を奨励して、「ほどほどの自給自足型経済」を強調していることもあり、バンコクの農業普及局では複合農業に関する問い合わせが目立つようになってきている。もちろん、複合農業だけで農村の抱える問題が解決できる訳ではないが、小規模農家が生きてゆくための「一つの選択」になりつつあるらしい。

今後ラオスが経済的に発展し人々の生活を先進国並みにするには、農業生産を飛躍的に増大させ、最終的には世界を相手に「売る農業」を展開して行かなければならないのかも知れない。しかし、ラオスより先に経済発展を遂げた隣国タイの農業を見ると逆に疲弊し、一部では伝統農業が見直されて来ている。こうしたジレンマは、どこかで断ち切らなければならない。21世紀に向けて持続的な農業農村開発や環境保全型農業の推進が叫ばれている現在、地域住民とのより一層の連携を図り、これまでの失敗を繰り返さないような開発手法を見つけ出して行きたいものである。 (ラオスにて：大沼)

